

山崎郷土叢書

NO. 132

平成31.2.23

山崎郷土研究会
兵庫県宍粟市山崎町

大谷 司郎

明治以降の山崎の年表 (五)

大谷 司郎

明治以降の山崎を中心とした出来事を年表にして五回目になります。今回は、昭和十八年（一九四三）から昭和二十六年（一九五二）までを取り上げてみます。太平洋戦争の終末期、敗戦、そして戦後の混乱期から復興に向かう激動の時代です。

戦時下の当地の記録が少ない中で、『山崎高等学校創立百周年記念誌（平成十九年発行）』から昭和十八年の頃を見ると、当時の山崎高等女学校では、学校が軍需工場化され、校内で軍隊の蚊帳縫製作業をしたり、食糧増産のため、山崎町五十波の揖保川中州にある五入道河原を開墾したり、正常な授業などできない状況にありました。昭和二十年になると、学校上空にも敵機が頻繁に飛び、空襲警報が続発されました。この地に空襲被害がなかったのが幸いだったとしか言えません。そして、終戦を迎えて、庶民は途方に暮れながらも混乱期を凌いでいきます。

戦後改革は多岐にわたっていますが、中でも昭和二十二年に教育基本法制定により、教育制度が六・三制の義務教育となり、新制中

目次

明治以降の山崎の年表 (五)	大谷 司郎	1
宇野正磯先生の地域史研究について	田路 正幸	4
日清戦争後の政局をめぐる福原謙七の時局観について		
品川弥二郎宛書簡より	松下 宣夫 / 高井 淳	8
山崎歴史郷土館 (三)	河本 雅視	14
ぶらりふるさと地名考シリーズ①「宍粟」	竹内 克司	16
研修旅行記 古墳と鉄砲の堺を訪れて	伊藤 一郎	18
上比地の岩田神社の當屋について	片山 昭悟	19
比地条里の研究		
金谷の条里地割を中心にして その2	片山 昭悟	20
会員・家族の文芸		24
事務局だより・編集後記		25

学校として、山崎町内では山崎・菅野・城原・神河・葛沢・三土の六中学校が設置されました。

また、新制高校は、従来の山崎高等女学校が母体となり、私立篠陽裁縫女学校と合併して、翌二十三年に県立山崎高等学校になり、男女共学で普通科と家政科が置かれました。定員は七五〇人でした。そして、その翌年には定員四〇人で林業科も設置されました。発足当初の校地は山崎町鹿沢にあり、隣地に小学校があるなど拡張の余地がなく、地域や関係者の働きかけで、現在の加生の地への移転は昭和二十九年になってからのことでした。

明治以降の山崎の年表(9)

西暦年	和歴	年	月	日	事項	出典
1943	昭和	18	6		食糧増産のため、山崎高等女学校生徒、五十波の五入道河原開墾する。	山崎高校創立百周年記念誌
1943	昭和	18	9		台風により戸原村で隔離病舎流失、水田流失5町歩、田冠水76町歩の被害あり。	宍粟(宍粟地方事務所編)
1943	昭和	18	10		宍粟合同自動車の四社統合した宍粟貨物株式会社、鹿沢にできる。	山崎郷土会報No.51
1943	昭和	18	10	29	郡是製糸山崎工場・蚕種製造所を戦時経済の中で日本蚕糸製造株式会社に事業経営を移譲する。	郡是製糸(株)六十年史
1943	昭和	18			最上山の時の釣鐘心召供出される。	山崎郷土会報No.51
1944	昭和	19			宍粟地方事務所焼ける。龍野土木出張所車庫より出火。元田村病院跡に移転する。	山崎郷土会報No.51
1944	昭和	19			学童疎開山崎に来る。	山崎郷土会報No.51
1945	昭和	20			疎開者で山崎の人口増える。都会地は空襲しきりで戦火広がる。	山崎郷土会報No.52
1945	昭和	20	3	9	空襲警報続発、配備に着く。本校上空も敵機しばしば通過する。	山崎高校創立百周年記念誌
1945	昭和	20	8		ポツダム宣言受諾する。	
1945	昭和	20	8	15	太平洋戦争終戦	
1945	昭和	20			食料の買出し闇屋横行する。	山崎郷土会報No.52
1945	昭和	20	9	18	水害により、城下村では堤防決壊、水田流失埋没1町歩あり。河東村では道路決壊177㍍、橋梁22㍍流失する。葛沢村では井堰8箇所流失、橋梁7箇所流失、水路850㍍流失する。神野村では田畑3町歩流失、5町歩埋没、橋梁6箇所流失、水稲無収穫田7町歩、野菜被害1町歩、浸水家屋200戸、家屋6戸流失する。	宍粟(宍粟地方事務所編)
1946	昭和	21	9		山崎青嶺句会が結成される。	山崎郷土会報No.52
1946	昭和	21			山崎忠魂碑除かれる。	山崎郷土会報No.52
1946	昭和	21			「リンゴの唄」流行する。	山崎郷土会報No.52
1946	昭和	21			外地引上げ復員兵続々と帰る。	山崎郷土会報No.52
1946	昭和	21			農地改革公布され、小作地率が激減する。	山崎町史
1946	昭和	21	12	16	双葉山一行、大相撲興行する。	山崎町史
1947	昭和	22			戦没者慰霊白鳩宮本多神社に合祭する。	山崎郷土会報No.52
1947	昭和	22			旧藩主本多邸の敷地が中学校に提供される。	山崎郷土会報No.52
1947	昭和	22	3	21	山崎小学校北校舎を仮校舎として山崎中学校が開校する。	山崎町史
1947	昭和	22	4	6	城下小学校と戸原小学校を仮校舎として城原中学校が開校する(26年4月に統一校舎へ入る)。	山崎町史
1947	昭和	22	4	6	河東小学校と神野小学校を仮校舎として神河中学校が開校する(24年2月に統一校舎に入る)。	山崎町史
1947	昭和	22	4	20	三河小学校に三河中学校を、土万小学校に土万中学校を併設する(26年3月に落成した校舎に入る)。	山崎町史
1947	昭和	22	4	22	上牧谷倶楽部、伊水・都多両小学校を仮校舎として葛沢中学校が開校する(23年10月に統一校舎へ入る)。	山崎町史
1947	昭和	22			郡内青年大会復活する。	山崎郷土会報No.52
1947	昭和	22			村上彰治氏山崎町長となる。	山崎郷土会報No.52
1947	昭和	22	6	15	宍粟郷土研究会が再発足し、第1回総会を実施する。	志佐波第1号
1947	昭和	22	7		菅野小学校東校舎を仮校舎として菅野中学校が開校(23年10月落成した校舎に入る)。	山崎町史
1947	昭和	22	8	10	宍粟郷土研究会、会報「志佐波第一号」を発行する。	志佐波第1号
1948	昭和	23	3	25	山崎小学校校庭で羽黒山、照国一行の大相撲興行される(入場料100円)。	横井時成氏講義資料
1948	昭和	23	4	1	山崎高等女学校、私立篠陽女学校を合併し、県立山崎高等学校と校名変更する(男女共学)。	山崎高校創立百周年記念誌
1948	昭和	23	4	1	山崎高等学校に定時制課程が併設される。	山崎高校創立百周年記念誌
1948	昭和	23	4	11	神姫バス山崎支社社屋火災	横井時成氏講義資料
1948	昭和	23	5		山崎小学校給食を開始する。	横井時成氏講義資料
1948	昭和	23	5	29	杉ヶ瀬村大火 午後5時ごろ 11戸全焼	横井時成氏講義資料

明治以降の山崎の年表(10)

西暦年	和歴	年	月	日	事項	出典
1948	昭和	23	9	9	夜半地震発生 11日の新聞で城下村付近が震源と分かる。	横井時成氏講義資料
1948	昭和	23	10	5	教育委員選挙投票日	横井時成氏講義資料
1948	昭和	23	8	15	保証責任山崎信用組合が設立される。	西兵庫信用金庫五十年史
1948	昭和	23			プロ野球選手山崎に来る。	山崎郷土会報No.52
1948	昭和	23			神姫自動車乗り場焼ける。	山崎郷土会報No.52
1948	昭和	23			映画館大繁盛する。	山崎郷土会報No.52
1949	昭和	24	1	18	財団法人瑠璃寺博愛会「博愛病院」鹿沢に設立される。	広報しそNo.34
1949	昭和	24	2		山崎町公会堂焼ける。	山崎郷土会報No.52
1949	昭和	24	3		山崎の劇場旭座、新富座町営となる。披露歌舞伎中村福助、市川九団次、実川延二郎来る。	山崎郷土会報No.52
1949	昭和	24	7		山崎新聞復刊される。	山崎郷土会報No.52
1949	昭和	24			郡是製糸工場存廃の岐路に立つ。	山崎郷土会報No.52
1949	昭和	24			俳句雑誌『青嶺』発刊される。	山崎郷土会報No.52
1949	昭和	24			山崎小学校まちのおじさん試みる	山崎郷土会報No.52
1949	昭和	24			山崎町の玄関口清水口より穴栗橋への道路幅員拡張工事始まる。	山崎郷土会報No.52
1949	昭和	24	12	27	市街地信用組合が認可される。	西兵庫信用金庫五十年史
1950	昭和	25	1		穴栗商工会議所創立総会開く。	山崎郷土会報No.52
1950	昭和	25			穴栗貨物自動車、山陽運送株式会社と改称する。	山崎郷土会報No.52
1950	昭和	25			竜野税務署徴税の嵐強く、差押え品公売する。	山崎郷土会報No.52
1950	昭和	25			配電会社停電多く非難の声高くなる。	山崎郷土会報No.52
1950	昭和	25	4	1	中小企業等協同組合法により信用組合へ改組となる。	西兵庫信用金庫五十年史
1950	昭和	25			最上山に再び時の鐘復活する。日に三度鐘の音響く。	山崎郷土会報No.52
1950	昭和	25	6		朝鮮動乱により闇屋横行する。	山崎郷土会報No.52
1950	昭和	25			山の緑化運動造林五カ年計画推進される。	山崎郷土会報No.52
1950	昭和	25			山崎中央商店街夏の風物詩一六夜店始まる。	山崎郷土会報No.52
1950	昭和	25	11		山崎町制60周年記念祭と山崎中学校新築落成に町賑わう。手踊り仮装行列町に行く。	山崎郷土会報No.52
1951	昭和	26			町営劇場早くも行き詰まり。	山崎郷土会報No.52
1951	昭和	26	2	26	穴栗郡一円の地区拡張が認可される。	西兵庫信用金庫五十年史
1951	昭和	26	4		中学校から高等学校への進学率が14.8%となる。	山崎町史
1951	昭和	26	5	20	三河村、土万村組合立三土中学校が開校する。	山崎町史
1951	昭和	26	7		山映館できる。各地区公民館などでの上映会も行われた。新富座と映画の競争時代始まる。	山崎郷土会報No.52
1951	昭和	26	8	22	穴栗信用組合と名称変更が認可される。	西兵庫信用金庫五十年史
1951	昭和	26			山崎東和通りのスズラン灯復活する。	山崎郷土会報No.52
1951	昭和	26			夏の夜空を飾る十二波の納涼花火大会と商店街大売出し開催する。	山崎郷土会報No.52
1951	昭和	26			山崎町自治体警察廃止か存置かの住民投票の結果廃止となる。	山崎郷土会報No.52
1951	昭和	26	10	1	兵庫県山崎地区警察署と改称される(総員54名)	山崎郷土会報No.52
1951	昭和	26			神姫自動車運賃改正、姫路山崎間90円となる。	山崎郷土会報No.52
1951	昭和	26			自転車盗横行する。	山崎郷土会報No.52
1951	昭和	26	11		横綱千代の山、栃錦一行大相撲山崎に来る。	山崎郷土会報No.52
1951	昭和	26	12		穴栗郡物産産業振興共進会開催。第1会場仮装行列手踊り等で賑わう。	山崎郷土会報No.52
1951	昭和	26			町の停電がしきりで電気代不払いの声高くなる。	山崎郷土会報No.52
1951	昭和	26			遺族補償を巡って旭座で遺族決起大会開く。	山崎郷土会報No.52
1951	昭和	26			引原ダム建設決まる。	山崎郷土会報No.52
1951	昭和	26			生谷温泉復活の声あがる。	山崎郷土会報No.52
1951	昭和	26	12	27	穴栗信用金庫へ改組する。	西兵庫信用金庫五十年史

宇野正磯先生の地域史研究

田路 正幸

一、はじめに

平成十九年（二〇〇七）五月、長年にわたって宍粟の地域史の調査研究を牽引し、昭和四十六年（一九七一）からは山崎町歴史研究会の会長を務められた宇野正磯先生が逝去されました。逝去後の本会報第一一〇号には、前身の宍粟郷土研究会の会報第一号以来の先生の論考と、史料集・町史・随想集などの主要な編著書の目録が掲載され、合わせて先生と深い縁のあった方々による追悼の辞が寄せられています（注1）。

地域史研究の偉大な先達を亡くして早くも十二年を迎えようとするにあたり、本誌面をお借りして先生の業績の一端をあらためて振り返ってみたいと思います。

二、宇野先生の地域史研究の根幹

宇野先生は、本会報以外にもさまざまな研究会誌や刊行物に数多くの論考を残されています。管見の限り、最も早い時期の記名論考は、昭和二十九年（一九五四）の頃ではないかと思われます。同年二月に県立山崎高校地歴史の機関誌である『地理歴史研究』が創刊され、クラブ顧問として生徒の指導に当たられていた先生が冒頭に仏教芸術に関する論考を発表されています（注2）。

同校地歴史は、昭和三十八年（一九六三）には地理歴史部となり

ますが、生徒たち自らが地域を訪ね、史料の探索や古文書の解説、関係者への聞き取り調査を行い、報告や論考にまとめるといふ活動を行っています。また、各号では、山崎藩の武家屋敷、播磨地域における木地師、桓武伊和神社の当屋制、地域の遺跡や古墳の分布調査の特集を組むなど、きわめて水準の高い研究成果が掲載されているとともに、宇野先生の後々の地域史研究の根幹ともいふべき活動であったと評価することができます。

三、宇野先生の地域史研究のテーマ

先の執筆目録に見られるように、先生の地域史の調査研究にはきわめて多岐にわたるものがありますが、子細に眺めると先生の研究の関心がいくつかのテーマにまとめられることに気づきます。以下に、それぞれのテーマに沿いながら先生の地域史研究の歩みを辿ることとします。

（一）宍粟のたたら製鉄

宍粟市は、奈良時代初めの『播磨国風土記』宍禾郡の条の産鉄記事以来、明治十年代にいたるまで盛んに鉄づくりが行われていた地域として知られています。中世には、「宍粟鉄」・「千草鉄」・「千草鋼」の名が現れ、刀剣の原料として最高品質を誇ったといわれています。江戸時代には宍粟の北部一帯でたたら製鉄が盛行し、その背景には、原料の良質な砂鉄と燃料の木炭を供給する豊富な山林資源の存在があります。

宍粟の基幹産業ともいえる製鉄の歴史をいち早く研究テーマとし

て取り上げ、広島大学に設立されて間もないたたら研究会の研究紀要（注3）及び宍粟郷土研究会の会報（注4）に論考を発表されています。その後も、宍粟の製鉄に関する調査研究は先生のライフワークともいえるべき一大テーマとなり、関連する備前長船鍛冶などの問題も含め、本会報以外にもさまざまな機関誌や論文集（注5）に寄稿され、晩年には『宍粟鉄の軌跡を遂うー千草鉄山史話』（注6）としてまとめられています。

この分野での先生の最大の功績は、既に散逸が進んでいた鉄山関係史料を丹念に集成し、『近世千草鉄山史料』上・中・下として刊行されたことにあります（注7）。とくに千草屋平瀬家に伝わる「千草屋手控帳」は、江戸時代の鉄山師の経営実態を知るうえでの一級史料です。近年、詳細な解説が付された翻刻が刊行（注8）されましたが、この史料の重要性に逸早く注目し、世に問われた先生の慧眼に敬意を表さざるを得ません。

（二）揖保川の高瀬舟

江戸時代のたたら製鉄の研究を進めるうえで、避けて通ることのできないのが、宍粟北部の深山で生産された鉄の流通と販路の問題であることはいまでもありません。この分野の研究についても先鞭をつけられたのが宇野先生でした。

揖保川の高瀬舟による水運が網干から山崎の出石まで開通したのは、元和年間（一六一五〜二四）に山崎町の商人である龍野屋孫兵衛や英賀屋弥次兵衛らによるものといわれています。出石の東西両岸には、舟着き場や舟問屋、倉庫、茶屋、旅籠などが建ち並び宍粟

の商業、流通の拠点として繁栄しました。ここには、宍粟郡内の年貢米や麦、大豆、木材、薪、炭、千草鉄などが集積され高瀬舟に載せられて揖保川を下って行き、上りには肥料、塩、干魚、日用雑貨などが運び上げられました。

先生の揖保川の水運と高瀬舟への論及は、先の鉄山業の研究と相前後する昭和三十年代に遡り、昭和五十二年（一九七七）刊行の『山崎町史』の「揖保川舟運（高瀬舟）」の記述を経て、平成七年（一九九五）の『播磨学紀要』創刊号に掲載された研究成果（注9）、そして平成十七年（二〇〇五）の『河川は住民の幹線動脈―播磨の高瀬舟』（注10）として集大成されています。

（三）伝統民俗芸能

宍粟北部の一宮町横山、波賀町安賀八幡神社、同町原八幡神社、千種町鷹巣には、「チャンチャコ踊り」と呼ばれる鉦・太鼓の伴奏と踊り歌をもつて踊る特徴的な伝統民俗芸能が伝えられています。隣接する但馬地方にも、「ザンザカ踊り」、「神子踊り」などとも呼ばれる同様の踊りが分布し、もとは山崎町上ノ・小茅野、波賀町戸倉・道谷・引原でも行われていたようです。

宇野先生の研究には民俗学的視角も含まれていますが、「チャンチャコ踊り」の研究は、昭和三十七年（一九六二）から三十九年（一九六四）に発行された西播史談会の会誌である『播磨』第五三・五四・五六・五七号の四回にわたって掲載されています（注11）。それぞれの踊りの衣装や所作、歌詞などを詳細に比較分析し、歌詞の内容が中世歌謡に源流をもつことなどを明らかにされました。

(四) 木地師と紙漉き

テーマ全体を通じて先生の研究の基盤には、森林や山の産業、そこで暮らす人々の生活や文化への強い関心があったように思われます(注12)。

木地師は近江地方東部を發祥の地と伝え、轆轤を用いて椀や盆などの器物を製作し、その原材料を求めて全国各地の深山に分け入ったといわれています。宍粟の各地にも多くの木地師の居住が知られていますが、その技術や生活について山崎高校地歴班の生徒とともに調査をされた成果は、早くも昭和三十五年(一九六〇)の『地理歴史研究』第七号に発表されています(注13)。宍粟の木地師研究に関する限り、現在においてもこれを超えるものはないといっても過言ではありません。

播磨国は、多可郡の杉原紙に代表されるように古代から和紙の産地として名を知られた地域です。宍粟においても、江戸時代に各川筋の村々で紙漉きが行われていたことが文献史料で知られています。紙漉きについては、長年温められていたテーマと思われ、木地師の研究と合わせて先生の遺著である『播磨北域の紙漉き人と木地師の技』(注14)として結実しています。

(五) 自治体史の編集

これまで見てきたように、さまざまな分野で地域史研究を深めて来られた先生にとって、『山崎町史』の編集委員長、『安富町史』の編集委員はまさに適任であったといわざるを得ません。『山崎町史』の山崎藩の広範な分野の記述、『安富町史』通史編の安志藩の

治世に関する研究成果は、地方自治体史における近世史研究の一つの到達点といえるものと思われれます。

(六) 古文書研究

先生の地域史研究の基礎をなすものに、古文書史料の解読と分析があったことはいうまでもありません。昭和五十二年(一九七七)には、同好の士とともに古文書研究会を始められ、平成四年(一九九二)にいたるまで多くの古文書の解読を続けられました。

同時に会誌である『語り継ぎサロン』を第六〇号まで発刊され、『千草鉄山史話』をはじめとする記名、無記名の記事をほぼ毎号に寄せられるなど、その精力的な活動には驚嘆するばかりです。さらに、高瀬舟文書などテーマ別の史料や村・社寺の所有文書を史料集としてまとめられた労苦は特筆に値するものといえます。

(七) 路傍観察と考現誌

この分野についての関心は、先生の晩年ともいえる平成八年(一九九六)あたりから顕著になっているように思われます(注15)。その背景には、二十世紀から二十一世紀への時代の変遷と画期を迎え、急速に変わりゆく郷土の景観を観察記録し、今後の地域のあり方を描いていきたいという強い思いが感じられます。

四、まとめにかえて

以上、宇野先生の生涯にわたる地域史研究の歩みについて、主としてその著作をもとに概観して来ましたが、もとより先生の業績はこれにとどまるものではありません。何よりも先生の研究生生活の最大の特徴と功績は、調査研究の対象地域(フィールド)を一貫して

宍粟の地に置かれたということに尽きると思われます。そこには、先生の郷土に対する愛着と誇り、地域の歴史の解明と記述に対する溢れるばかりの熱い想いを感じずにはおられません。

最後に私事ながら、筆者は幸いにも短時日ではありますが先生の晩年のお姿に触れる機会をいただきました。私のような弱輩に対しても気軽に声をかけていただき、温かく接していただいたことを忘れることができません。

今回、浅学を顧みず先生の意に反するかもしれない拙文を草したことをお許し願うとともに、些かでも先生の学恩に報いるよう精進することを肝に銘じて供養に代えさせていただきます。

第三号 二〇一八年

注9 宇野正碓「揖保川高瀬舟通運史の研究」『播磨学紀要』創刊号 一九九五年

注10 宇野正碓「河川は住民の幹線動脈―播磨の高瀬舟」(地域史・栄光と影 随想 第三編) 二〇〇五年

注11 宇野正碓「宍粟の民俗芸能―チャンチャカ踊考」・「同(二)」・「同(三)」・「同(四)」『播磨』第五三・五四・五六・五七号 一九六二―六四年

注12 宇野正碓「播磨北域の森と樹の文化」(地域史・栄光と影 随想 第一編) 二〇〇五年

注13 山崎高等学校地理歴史班編「播州に於ける木地屋の研究」『地理歴史研究』第七号 一九六〇年

注14 宇野正碓「播磨北域の紙漉き人と木地師の技」(地域史・栄光と影 随想 第四編) 二〇〇七年

注15 宇野正碓「山崎町の変遷と今後(一)」「(四)」(追補)『山崎郷土会報』第九八―一〇一号 二〇〇一―〇三年

宇野正碓「路傍観察(一)」「(三)」―世紀の境を挟んだ考現誌』『山崎郷土会報』第九八―一〇一号 二〇〇一―〇三年

注3 宇野正碓「兵庫県宍粟郡における近世鉄山業について」『研究紀要』第一号 一九五八年

注4 宇野正碓「宍粟鉄について」『宍粟郷土研究会報』第一号 一九五八年

注5 宇野正碓「千草鉄と備前長船鍛冶―中世千草鉄研究試論」『日本製鉄史論』たたら研究会 一九七〇年

注6 宇野正碓「宍粟鉄の軌跡を遂う―千草鉄山史話」(地域史・栄光と影随想 第二編) 二〇〇六年

注7 宇野正碓編「近世千草鉄山史料」上・中・下 一九六六・六八・七〇年

注8 伏谷 聡「『千草屋手控帳』―解説と翻刻」『ひょうご歴史研究室紀要』

日清戦争後の政局をめぐる

福原謙七の時局観について

— 品川弥二郎宛書簡より —

松下 宣夫
高井 淳

一 はじめに

山崎闇齋研究会では、『山崎郷土会報』の一三〇号で、福原謙七について発表しました。一三〇号は生誕から逝去までの八十四年間の生涯を、まず初めに生まれてから郷里を出るまでの謙七の山崎での暮らしなどについて、そして十代半ばから十余年間の大坂での学びの時代について、更に山崎に帰ってからの教育者と官吏としての約二十年の時代、これに続く二十年にわたる地域の人材を育てる靖献義塾と殖産興業に力を注ぐ時代、最後に大阪に出て鍼灸と詩歌を愛する晩年の時代をそれぞれ記述しました。また、一三一号はそれらを年表にまとめて整理しました。

今回その調査の中で発見した謙七から品川弥二郎への書簡の一通を読み下し、現代文に訳し、その内容を解釈することで謙七が生きた明治という時代の中での彼の考え方や行動を見つめ、何をなそうとしたのか、結果的にはどうなったのかを考察し謙七の人物像を描き出したいと思います。

二 品川弥二郎宛書簡とは

謙七は明治二十七年（一八九四）の日清戦争の時、品川弥二郎が広島に行った帰りに龍野町に立寄ってもらい、地域の殖産興業、特に林業についての講演を依頼しそれが実現しました。その時六粟郡

の各町の有志に講演を聞かせました。それがその後の六粟の林業の発展に繋がりました。その品川と謙七の関係を調べていくうちに、この品川弥二郎への書簡を三通見つけることが出来ました。今回紹介する書簡は、明治二十九年三月に書かれた一通です。達筆ですが、少し癖が強く読み下すのに、苦勞しました。

品川弥二郎は、天保十四年長州で生まれました。安政四年（一八五七）九月、十四歳で松下村塾入門（同門には高杉晋作・伊藤博文・山県有朋・前原一誠など）。慶応元年（一八六五）十二月、桂小五郎（木戸孝允）の上京にあたり、薩摩藩士黒田清隆、土佐浪士田中光顕と随行し、薩摩藩邸で西郷隆盛と薩長の本音突き合わせて打ち出した武力同盟の密約を坂本龍馬の立ち合いのもと交わす。品川は慶応二年二月、木戸孝允から託された二通の密書を預かり、京都に潜伏して朝廷工作の任務を遂行、近衛邸を経て無事上奏、命がけの使命を果たしました。後日、王政復古の号令となり朝権は岩倉具視を中心とする討幕派のものとなりました。慶応四年一月、戊辰戦争では奥羽鎮撫総督参謀、整武隊参謀として活躍しました。

明治三年八月、政府の命によりヨーロッパ派遣、翌年六月、英国に留学、ドイツ公使館に勤め帰国後、内務少輔、農商務大輔、ドイツ公使等を歴任、さらに松方正義内閣の内務大臣を勤め、明治二十五年の衆議院総選挙で、選挙干渉を行い失脚しました。その後、西郷従道を会頭とする国民協会という内閣支持の政治団体の副会頭を経て会頭となりました。

この書簡は同会員であった謙七が品川会頭に宛てたもので、もちろん相手を十分に立てながらではあるが、熱い心の内を吐露するよ

うに、齒に衣着せぬ言葉が連なっています。この書簡は明治二十八年、日清戦争の勝利で意気が上がった世論を三国干渉で消沈させられ、そして翌二十九年朝鮮国王がロシア公使館へ移り親口政権を樹立したという状勢の時に書かれたものです。三の書簡の前半を松下宣夫が、四の書簡の後半を高井淳が担当しました。

三 書簡の前半・「容易軽拳の沙汰」は誤り

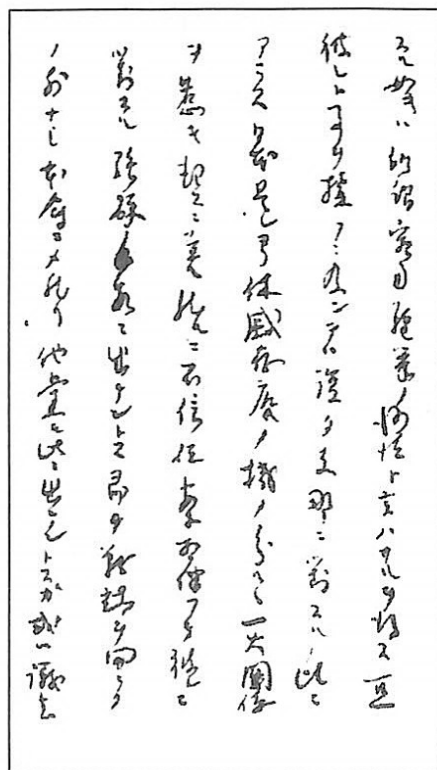
「謹みて愚意左右に献呈す」という遜（へりくだ）った言い方で始まる巻紙二四字×一五二行の書簡は、日清戦争で下関条約を勝ち取り三国干渉で遼東半島を手放し、さらにロシアからの挑発が続きいらいらする当時の複雑な日本の状況を表す様な気持ちを述べた内容が続いていきます。

明治の初め頃から日本は朝鮮に何度も困難な状況に陥らせられながらも我慢に我慢を重ねてきました。例えば、明治元年（一八六八）十二月、新政府が改めて国交の樹立を求めたところ、国書の形式の違いを理由に拒否されました。また朝鮮では「衛正斥邪論」（日本でいう攘夷論）が多数の意見を占めていたこともあり、西洋化政策の日本に警戒感を抱いていました。その後西郷隆盛が征韓論を唱え、岩倉、大久保両大臣がそれを宥（なだ）め中止させます。明治八年九月に日本の軍艦雲揚と、朝鮮の江華島砲台との戦闘（江華島事件）が起き、その後、日本は日朝修好条規を締結し釜山が開港しました。明治十五年壬午事変で日本人軍事顧問らが殺害されます。その後日本は朝鮮と濟物浦条約を締結して守備兵の駐留が認められました。明治十七年には朝鮮の大院君が日本の援助を得てクーデター（甲申事変）を起こすが、清に鎮圧されます。清ともまた同じように困難

が熾烈を極め日本としての対応が難しくなっています。日本はその我慢を続けていき、ギリギリまで我慢しその流れの中で最良の準備をし、行動し成功を収めることに繋がりました。

明治二十八年四月に日清戦争勝利の後、下関条約（清は朝鮮の独立承認、遼東半島・台湾・澎湖列島の割譲、賠償金二億両支払など）を締結しました。その後、ロシアへの日本の緊張感の高まりが続きます。そして、ロシア、ドイツ、フランスの三ヶ国が日本に対し清国への遼東半島返還を勧告（三国干渉）し、返還せざるを得ませんでした。翌二十九年二月には親口派グループの援助により、朝鮮国王はロシア公使館に新政府を樹立しました。また、朝鮮は衛正斥邪論のもと、日本軍と交戦した。これらは裏でロシアがさせていると言われていました。これが即ちロシアの初めての暴行と謙七は言っています。ロシアの暴行は今回が初めての事で、その初めての暴行に我慢せずして、暴行に対して何も考えずに直ぐにやり返すのは稚拙であると謙七は考えます。

謙七の書簡には、次のような文面（写真1）があります。



福原謙七の書簡（写真1）

：所謂容易輕拳ノ沙汰ト言ハサルヲ得ス一日彼レト事ヲ構フニ及ソテ
八復々支那ニ対スルノ比ニアラス日本是レヨリ休戚存廢ノ機ノ分ルル
一大關係ヲ惹キ起スニ至ル然ルニ不信任案相伴フテ彼レニ対スル強
硬手段ニ出テントス即チ戦端ヲ開ラクノ外ナシ：

・・・対口開戦は、俗に言うやり易いことを軽々しく行動し、簡単にやってしまうことだ。ひとたびロシアと交戦するとなると、支那に対するのは比べものにならない。これにより日本の存亡が分かれるとても重要な関係を引き起こすことになる。こうであるのに対口政策不信任案提出という事態を受けて政府は、ロシアに対して強硬手段に出ることになる。即ち、ロシアと戦争を始め外ない・・・

これではいけない。取り越し苦労であればよいが・・・明治二十九年二月二十五日、謙七はいてもたってもおられず、急ぎ上京して品川弥二郎に拝謁し、前述の意見を述べ同意してもらいました。その後不信任案も撤回したことを聞き、喜びます。これにより謙七は内閣が内治優先路線を執り国内産業を支援し、国力増強が可能となると考えました。ロシアに対して四・五年間は国民挙げて、じっと我慢をして、将来の成功を期し長い間苦労を重ねる覚悟で、国力の充実政策に努め、時機の至るのを待たなければなりません。今日の状況より推測すればいずれロシアと大事に及ぶだろうと考えていました。

日清戦争と以後のアジア政策の基調を纏めると、第一に日本が勝

ったことで、領土も大きく増えたとし、当時の日本円にして三億五千万円ぐらいの賠償金も取りました。この当時、国家予算は大体五・六千万円だったので、国家予算の七年分ぐらいの賠償金を得たことになりました。第二に、清はそれまで「眠れる獅子」ということでいっつ力を発揮するかわからない、といってみんなが密かに警戒していたが、日清戦争の結果、あはれは眠れる獅子ではなかった、本当に腐り切っているということになって、ヨーロッパの強国がみんな清を馬鹿にするようになりました。その結果、アジアへの侵略が本気で行われるようになり、侵略の相手は、まず清であるとなって、世界各国が日本を含めて清に目を付けるようになりました。

それまで日本のリーダー達は大変慎重で、アジアを分割しよう、清を領分にしようとする気はなかったが日清戦争に勝ってしまうと、そういうふうにだんだん変わっていきます。日本もヨーロッパ列強も非常に大きく変化していきます。

これから先、ヨーロッパ各国はますます爪を研いで清を分割しようとする。それに対し、日本も一枚加わっていくという姿勢を次第にとるようになる。と同時に、ヨーロッパ各国の中では、北の方からシベリアを通して清や朝鮮に迫っていくこうとするロシアの南下政策に対する対抗意識が非常に強くなりました。ロシアは、それまで清本土とは関係がない、どこの領分とも分からなかった満洲の向こう、アムール川の地域でシベリア開拓を進め、鉄道を敷くという形で北の方からアジアに入りこみます。そして、そのシベリア鉄道の終点に当たるのは朝鮮の北、日本海に面するウラジオストックでありました。

謙七の書簡の翌月、ヨーロッパでは第一回近代オリンピック大会がアテネで開催（十三カ国二九五選手参加）されています。国力があつて安定した国々の国際交流が始まっています。

この年、六月には清とロシアが対日秘密条約調印（対日共同防衛・ロシアへの東進鉄道敷設権付与など取決め、李・ロバノフ協定）。

山県有朋特派大使、ロシア外相ロバノフと朝鮮に関する議定書に調印（山県・ロバノフ協定）。翌月に日清通商航海条約調印（製造業営業権・領事裁判権・最恵国条項などを獲得）。

ロシアは翌年に旅順、大連を租借すると同時に、シベリア鉄道の支線を清の領土の中に引張り、満州を突っ切つて、旅順・大連に至る鉄道を敷設（清の国の中にロシアの鉄道ができることになった）。ドイツも青島を租借して要塞を造りアジア進出の拠点とする。フランスも広州湾を租借する。要するに清はあつちこつちの国から狙われ、少しずつかじり取られる状態が生まれました。日口の国際関係は緊張を深めてきました。

四 書簡の後半・・・「変遷の貶手段」で政策論争を

国民協会はあれこれと偏らず本よりすぐれた大きな見識を持つ大義ある政党である。それが今回、内閣不信任案を提出することになる。これではいけない、と謙七は考えます。不信任案提出という事は、即ち対口軟弱外交の内閣を拒否するということです。それに従うと日本の外交政策は対口強硬路線に転換することになり、日本の存廃が決まります。これは結局ロシアと戦争をすることです。今ままで朝鮮、清は日本に対して何度も挑発、暴行をしてきましたが、限界まで耐え忍んだ状態でやっと大詔が下り、清と戦い結果は勝利を

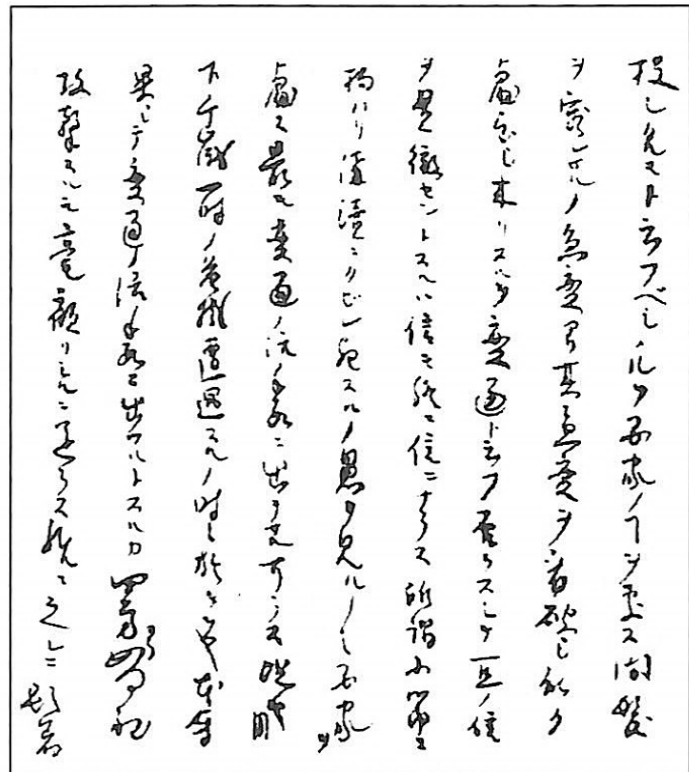
得ました。ロシアと朝鮮・清とは国力も底力も違い、もつと恐ろしい。その当時の日本は、明治維新から四半世紀で殖産興業、富国強兵に力を入れ、漸（ようや）く発展しつつあつたが、さらに力を注ぐ必要があり、謙七は内閣の政策実行においては、ロシアに対して耐えなければいけない時期との考えでした。まだ経済的にも軍事的にも相当差（別表）があつたのです。

	日本	ロシア
GNP (100万ドル)	1200	8800
一人当たりの GNP (ドル)	30	70
軍事費 (100万ドル)	66	204
財政に占める 軍事費の割合	45.50%	21.60%

別表
明治33年の日本とロシアのGNPと軍事費

謙七はロシアの暴挙に対して深い考え無しに直ぐにやり返すというのは、稚拙なやり方であり、様子を見ながら日本とロシアとの力関係も考えつつ知恵を使い外交をやるべきであると考えていました。三で記したように明治二十九年二月二十五日、謙七は矢も盾もたまず上京し品川弥二郎に拝謁、前述の意見を述べ、同意を得ました。そのの不信任案も撤回したことを聞き喜びました。しかし、新聞は、「国民協会は不信任案を提出しておきながら、心変わりし、撤回した。その理由を追及したが、国民協会の明確な説明は無かった」というのである。これでは協会の面目丸つぶれである。きちんと弁明して欲しいと謙七は考えます。

謙七は、変通と信について次の様（写真2）に書いています。



福原謙七の書簡(写真2)

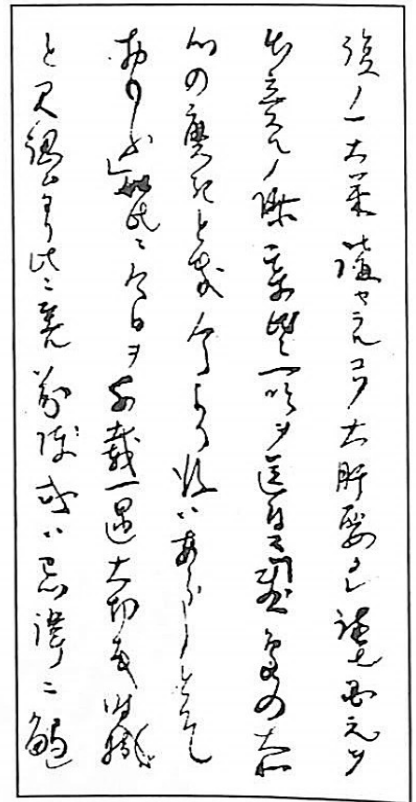
…凡ソ国家ノコトヲ處ス鬪鬪
ヲ容レサルノ急変アリ其急変ヲ看破シ能ク
慮念シ来リヌルヲ變通ト云フ否ラスシテ一旦ノ信
ヲ貫徹セントスルハ信ヲ終ニ信ニナラス所謂不節ニ
拘リ溝瀆ニクヒレ死スルノ愚ヲ見ルノミ国家ヲ
慮ス最モ變通ノ貶手段ニ出テサル可ラス況ヤ目
下千載一時ノ危機遭遇スルノ時ニ於テヤ本會
果シテ變通ノ貶手段ニ出ツルトスルカ四方ヨリ如何配
攻撃スルモ毫モ顧ミルニ足ラス…

…国家のことを対処する非常に切迫した急変の、その本質を見破り熟慮する事から来る考えや行動を変通と云う。それをしないで、一旦の信を貫徹せんとするのは、結局は本當の信にはならない。節操がないなどと攻撃されるなどこたわっていると下らない死に方をするだけである。国家の事を考え、最善より少し落ちるが良い手段、つまり変通の貶（へん）手段に出なくてはいけない。今やまさに千載一時の危機遭遇の時にいてこそこれをしてはいけない。本會、本當に変通の貶手段に出た時に、廻りからどれだけ攻撃されても気にする必要はない…

深く考えてみると、清に対する以上にロシアに対してはさらに我慢を重ねて、時期を待たねばなりません。いずれはロシアと大事に及ぶことは明白です。このような難しい時に敵愾心（てきがいしん）でもってロシアと接することは危険極まりなく、国民協会が変通の一策をとったのはこの状況を勘案したからです。ところが新聞は「會員の中に脱会者があり、戦いから逃げている者がいる。これは国民協会が変心したからだ」として非難しているのです。謙七はこれを変心とは考えていません。変通の貶手段であるというのです。これから四・五年は、国民一体となり臥薪嘗胆の覚悟を以って隠忍、時期が来るのを待たねばならないというのです。

最後に、謙七は品川弥二郎会頭に「早急に會員を招集して国家の為、国民から失った信頼を回復する重要な手段を行うことが非常に大切です」と訴えます。

謙七は国元を出る際に某氏に一吟（写真3）を送付しています。



福原謙七の書簡(写真3)

：謙七国元ヲ

出地スル際某氏ニ一吟ヲ送付ス「敷島の大和

心の慶□と哉今より後ハあらしとぞ

おもふ」如此ニ今日ヲ千載一遇大切ナキ時機

ト見認ムタリ此ニ至ル：

．．．謙七は国元山崎を出立する時に、某氏に一つの詩を詠んで送りました。それは「敷島の和心の慶□と哉今より後ハあらしとぞおもふ」という詩でした。このような今日を千載一遇という千年に一回しかないようなめったに無い機会と捉え、自分がやるべきことをやる正にその時であるとの考えに至ったのです．．．

この詩の中の一字は読めていませんが、あえてこの詩の全体を推測してみると、この危急存亡の時に日本の国を思う謙七の行動すべき時は今しかないという強い決意を表しているのではないかと思えます。

五 おわりに

今回、この福原謙七から品川弥二郎への書簡を読むことにより、明治という近代日本の歴史の中で、謙七が山崎と東京を往来し、また書簡で繋がりがながら、日本という大きな舞台で躍動していたことを知り、志の一端に触れることが出来ました。今後とも引き続き残りの二通を研究したいと思えます。

山崎闇齋研究会会長の鎌田裕明さんには多くの助言を頂きました。また宍粟市立図書館の小西亜紗子さんにも国立国会図書館に関する助言と手配をして頂きました。記して感謝申し上げます。

参考文献

福原謙七「品川弥二郎関係文書目録（その一）書簡の部 資料番号百二十六 リール番号五『福原廉（ママ）書簡』」国立国会図書館憲政資料室（資料分類表記整理番号による）

吉川弘文館編集部『日本近代史年表』平成二十年 吉川弘文館

児玉幸多『史料による日本の歩み近代編』昭和二十六年 吉川弘

文館

中村隆英『明治大正史上・下』平成二十七年 編者原朗・阿部武

司 東京大学出版会

古川薫『品川弥二郎志士の風雪』平成二十四年 文芸春秋

隅谷三喜男『日本の歴史』二二 昭和四十九年 中央公論社

中村哲『日本の歴史⑩明治維新』平成四年 集英社

海野福寿『日本の歴史⑩日清・日露戦争』平成四年 集英社

武田知弘『大日本帝国の国家戦略』平成二十五年彩図社

一一二頁の表より「別表」を筆者作成

「山崎歴史郷土館」(三)

◎郷土館で山崎の歴史を体感してみませんか◎

河本雅規

山崎町の歴史(鎌倉時代)

第三回目の今回は鎌倉時代(一一八五〜)について考えてみたいと思います。

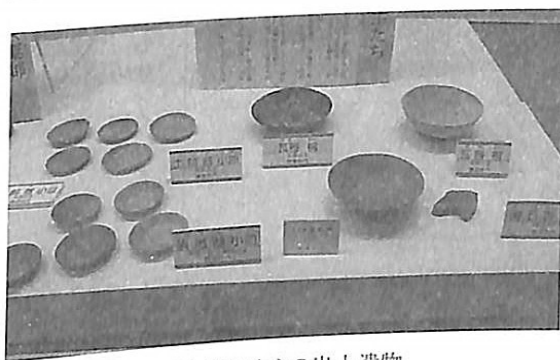
●郷土館の展示で、鎌倉時代の出土遺物を見ますと、写真に見られますように河東地区の矢原や神谷から発掘された土師器(はじき)や須恵器(すえき)の小皿、そして瓦器(がき)碗が見られます。また、変わった物に滑石製石鍋の破片や中国製の青磁碗も見られます。

鎌倉時代に当地に住んでいた人たちはこれらの器物を使ってどんな生活を送っていたのでしょうか。

平成二十一年夏、河東小学校南の道

路工事に伴い、遺跡の発掘調査が行われた際、弥生時代、古墳時代と共に平安・鎌倉時代の遺構として、柱の穴数個が見つかっており、まだ断定できないが建物跡の一部と思われると言うことです。鎌倉時代の屋敷があったのでしょうか。

山崎町内では、古代の住居跡の復元はありませんが、一宮町の家



矢原・神谷からの出土遺物

原遺跡では古代の住居跡や中世の屋敷跡が発掘され、各時代の建物が復元されていますのでご参考にしてください。

ところで、館内の展示物の説明書によると、「中世の宍粟郡」として、「平安時代後期から末期にかけて宍粟郡内には朝廷の地方機関である国衙(こくが)(国の役所)が支配する公領に加え、有力な貴族や寺社の所有する荘園が置かれるようになった。特に鎌倉時代以降その数は増加し、郡南部には高家(たかや)荘、柏野(かしわの)荘、石作(いしつくり)荘など、北部には安積保、三方荘、三方西(みかたのさい)荘などが立荘された。」とあります。平安時代に開墾によって私有地となった荘園が、鎌倉時代にかけて朝廷や貴族へ寄進されたことにより、貴族の荘園が増えたようです。宍粟でもそのような荘園が多く見られます。

『山崎町史』によると矢原・神谷近辺九カ村は石作荘として出ています。そして、本所(領主)は平氏・八条院・久我前大納言・安楽寿院・久我家各領と移り変わっています。

鎌倉時代後期には比地荘・伊沢荘・菅野荘も見られます。都多保は官衙領または国衙領と出ています。

以上のようなことから、河東地区は早くから開け、平安時代には貴族の荘園となっていた事がわかります。その荘園の下で働き年貢を納め、展示されているような器を使い日々生活をしていたのででしょうか。それらの器を眺めながら今から七、八百年前の山崎を想像することも大切かと思えます。

●鎌倉時代といえは鎌倉幕府を開いた源頼朝を思い出しますが、

どんな時代なのでしょう。

公家・貴族の政治から武家政治へ一転した時代ですから初めからうまくいったわけがなく、初期には武家法の「御成敗式目」も制定されていますが、御家人である武士の中には年貢だけでは飽き足らず村人の家へ押し入り収奪をする者もあり、村人は耕作を放棄して逃散し、田畑は荒れ、年貢も集まらぬ地域も出る状況になりました。そのような鎌倉時代中期に、救世主のように出現した鎌倉幕府五代執権北条時頼は、戦に明け暮れ、教育もままならなかった武士の間性を養えようと禅宗を取り入れ、鎌倉に建長寺を建て、慈悲・忍耐の心を養うと共に、百姓をいたわる「撫民（ぶみん）政策」により世の中を変えていきました。

この、北条時頼につきましては謡曲「鉢の木」などで諸国回遊のことはご存知の方も多いと思いますが、ごく近くの三日月町にその時頼像（国指定重要文化財）があります。時頼像は全国で二体しか無く、一体は鎌倉建長寺にある俗体像であり、あと一体が三日月町にある僧体の像です。

●佐用郡三日月町春哉最明寺（高蔵寺末寺）の鎌倉幕府五代執権北条時頼の像

やまさき文化大学（かしわの学園）歴史探訪講座において、西播班では毎年三日月町春哉の最明寺にある国の重要文化財北条時頼像を拝観しています。像のある春哉は山崎町には属しませんが、『山崎町史』に江戸時代の三日月藩時代には、山崎町の土万・今出・大沢・青木・上牧谷・大谷・下野・蟹ヶ沢・五十波・与位・杉ヶ瀬・

木ノ谷の十二村が三日月藩領として記載されています。また、三日月町春哉は山崎町に隣接する地であって関係は深いと思いとりました。

『三日月町史』による概要は、春哉村は小さな村であり、また最明寺も小さな寺でありながら、なぜ昔から有名なのかと言うと、この寺に「北条時頼の木像」「時頼の位牌」とい



北条時頼坐像（写真提供：佐用町教育委員会）
上記転載許可済

ろな言い伝えや記録が残っているからであると言うことです。また、今から約七百年前の鎌倉時代中期、鎌倉の五代執権北条時頼が執権職をゆずって隠居し、最明寺入道と称し、民情を視察するため諸国を回ってその途中、陰暦十一月、当時下志文といっていたこの地に来た時、大雪で道に難儀し、このの民家に宿をとり、旅の疲れからか病気になる、三か月間滞在しました。そして、その滞在中に僧体の木像一体と春哉の歌を残し、村人に別れを惜しんで立ち去ったといわれています。

その時の歌は、春哉の里と題して

深雪（みゆき）にもあさる雉子（きぎす）の声聞けば

おのが心はいつも春哉

この歌から下志文は春哉と呼ばれるようになったということ。

ぶらりふるさと地名考シリーズ①「宍粟」

竹内 克司

宍粟は肉や穀物の豊かな地

宍粟という地名は、『播磨国風土記』（奈良時代前期）にこの地名が登場します。風土記成立時すでに長老の言い伝えとなり、イワノオオカミとアメノヒボコの二神によるユーモラスな土地の争奪戦によって地名が生まれていったことが記されています。ちなみに宍（肉の異体字）は、動物の肉、粟（禾）は、穀物を表し、狩猟と農耕の盛んな地で肉や穀物の豊かさを二字で表現したと考えられます。宍粟の表記は、風土記には「宍禾郡」とあり、しさをのこおりと読みます。飛鳥池遺跡や平城宮跡で発見された木簡には「宍禾郡」と「宍粟郡」の二つの表記があります。その後「宍禾」が「宍粟」に統一され、読みが「しさを」から「しそう」と変化していったようです。

播磨国宍粟郡三方里

裏 神人□□五斗

播磨国宍禾郡柏野里

裏 山部子人米五斗

跡簡 遺木 池堀 飛鳥 跡簡 宮堀 平城 発掘

イメージ図

※木簡は、地方から朝廷への税として運ばれた物産の荷札に使われた。

天正年間（一五七三〜九三）羽柴秀吉が播磨を制圧し手柄を立てた家臣宛ての感状や知行状には「完粟郡」と書かれています。その表記は江戸時代にも引き継がれます。

今から四〇年前、初めて手にした『山崎町史』（昭和五二年発行）の冒頭のカラー頁に「完粟山崎之絵図」とあり、思わず誤植かと思つたことを今も覚えています。

県外にある二つの宍粟

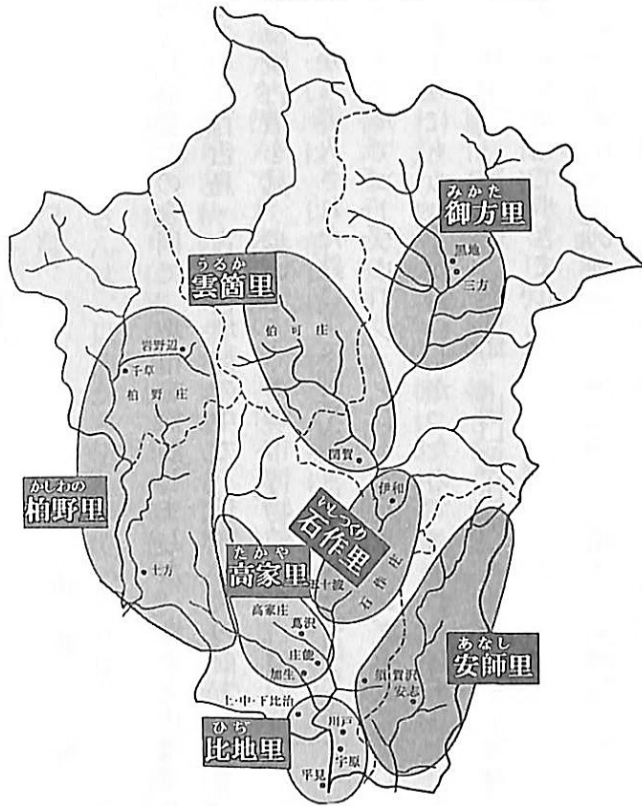
一つは、岡山県で偶然見つけたのが宍粟の標識。それは総社市北部、高梁川の中流東岸にある小さな集落です。この地区は宍粟の古名と同じ「しさを」と呼んでいます。これは単なる偶然の一致ではなく、古代播磨国から吉備国へ何らかの目的のための職業的集団移動があったと推測しています。

もう一つは、北海道に宍粟という地名が残っています。明治二七年（一八九四）蝦夷地と呼ばれた北海道石狩平野の篠津原野に開拓団として骨を埋めた宍粟郡出身の人たちの足跡です。

合併に伴う市名改正の問題点

平成の大合併に伴う市名変更に「何、それ」と思うような市名の出現が目につきました。市名のイメージアップをねらうあまり、隣の市町に迷惑をかけたケースもありました。今思うに、市名を一部の人で決めるのは論外ですが、民主主義だといって公募で決めるのは必ずしもいいとは言えません。市名変更に關しては、国が指針を設けることや有識者が幾つか提案し、その理由を示したうえで、住

しざわのこおり
播磨国風土記 宍粟郡の七つの里



『安富町史 通史編』より（一部修正を加える）

民がそれを参考にして選ぶという方法もあったと思います。少なくとも今を生きる住民は、伝統的地名をおろそかに扱うことなく、後世に伝えていく責任があります。

さいわい、宍粟市は宍粟郡を継承してよかったですと思います。ただ歴史的観点から言えば、宍粟郡の七つの里（御方里、雲筒里、柏野里、高家里、石作里、比地里、安師里）の安師里の大部分を占める安富町が姫路市に合併したため、宍粟郡五町の完全合併に至らなかったことが悔やまれます。

地名は成り立ちを知る「小さな文化財」

宍粟市は、『日本の珍名』（竹内正浩著）において難読地名の西の横綱に選ばれたことで話題になりました。

読めない、書けない、どこにあるかわからないと揶揄された宍粟市ですが、春の千年フジや秋の最上山もみじまつりには年々多くの観光客が訪れ、宍粟市が広く知れ渡っていることを嬉しく思っています。同時に初めて訪れる人のほとんどが最上山を「もがみやま」と読みます。展望台の下にあるお寺の正式名は最上稲荷経王院さいじょうなりきやうおんで岡山県の最上稲荷の遥拝所でもあり、地域住民はお寺のある山を親しみ込めていつの頃からか「さいじょうさん」と呼んでいます。

宍粟の読みや表記の変遷も歴史です。地名は風土の一片として地域の成り立ちを知る有力な手掛かりになります。それゆえ「地名は小さな文化財」といわれるのです。歴史の重みのある宍粟にはたくさん有形・無形の文化財があることを知って世に伝えていきたいものです。

参考：『日本地名大辞典』（兵庫・岡山・北海道）、『石狩平野 篠津原野への挑戦』、『安富町史』、「もうひとつの宍粟 岡山県総社市」(web)

お知らせ：山崎郷土研究会の諸先輩たちが執筆協力した『日本地名大辞典』（角川書店）と『日本歴史地名辞典』（平凡社）を元に平成二一年に「しそウの地名（ゆらい）」と題してしそウSNSで紹介しています。平成三一年一月現在アクセス総数四一万件と多くの方に見て頂いています。ぜひ一度アクセスしてみてください。

研修旅行記

古墳と鉄砲の堺を訪れて

伊藤 一郎

山崎文化協会との合同で、堺市を探訪しました。世界文化遺産をめざしている百舌鳥・古市古墳群の中で、世界最大の前方後円墳の仁徳天皇陵古墳を見、歩いて近くの堺市博物館にて古墳の時代に新たに大陸から導入された鉄による剣や鎧を見ることが出来ました。

昼は、ホテルアゴラーリージェンシーでバイキングを食しました。私は、あまりにもカレーがおいしかったのでおかわりしました。次に街並み探索で、清学院・鉄砲館・山口家住宅・与謝野晶子生家跡・千利休屋敷跡を見て歩きました。

鉄砲館では戦国時代の鉄砲を実際に持ち、重さを実感しました。また、色々な種類が有ったのには驚きました。一五四三年ポルトガル人が種子島に来て、鉄砲を伝えて三十年後の一五七五年の長篠の戦で信長軍は三千丁の鉄砲で武田軍に圧勝しています。この当時、堺は鉄砲の生産で日本一と言われており、また、当時の世界の中で日本の銃の数は、世界一だったと言われています。私なりの歴史解釈では大きな時代の変化は四つあり、変化の主な原因は産業技術の転換により起きたのではないかと考えます。

一つは、鉄剣による大和朝廷の日本統一。二つ目は、鉄砲伝来による戦国時代の終焉。三つ目は、ヨーロッパの産業革命を導入した明治維新。四つ目は、現在の我々が直面しているパソコンに見る通

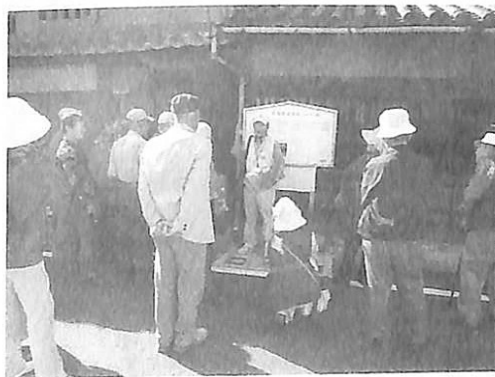
信技術の進歩と人工頭脳の開発ではないかと考えるのです。歴史の大転換の二つが、堺と関係を持って行われたと言って過言ではないと思います。実際に堺市を探訪して色々な施設を訪問すると、私の歴史解釈は間違っていないのではないかと実感した次第です。何度でも堺市を訪問したいと思いました。



仁徳天皇陵古墳



千利休屋敷跡



鉄砲屋敷跡

上比地の岩田神社の當屋とうやについて

片山昭悟

山崎町上比地字森ノ上の岩田神社には、當屋という神事が続いている。當屋とは、神社のことを一年間にわたって代理を務めることである。

當屋について昨年から當屋をされた上比地の志水誠喜さんに、平成三十年（二〇一八）五月二十七日（日）の午後六時頃にご教示いただいたので、その一端を紹介させていただきます。

當屋について、聞き取り調査によると、岩田神社の當屋は、上比地自治会の六隣保で、くじ引きにより當屋の順番を決められる。

そして、當屋は秋の祭りで引き継ぎをされる。当番は中間地点でされ一年間にわたり自宅の神さん棚にお札を祭り、毎月一日と十五日に花と水を替えるそうです。

神事については、以前には、神さん棚は、青竹に銅線を巻いて造って、清水を汲んでお米を炊いてお供えしていたという。

當屋は春の祭りと秋の祭りを仕切ることになる。それから子供相撲の行司を務める。祭りは隣保も協力して手伝うとのこと。宮総代されていた故藤川勉さんは、以前から伝わっていた當屋を務められていたとのことであった。

一年間岩田神社の神事を世話される。

上比地に祭られている天神さんや観音さんも世話をする。

上比地は「播磨国風土記」の宍粟郡比治里であることから當屋

の神事が残っているのであろう。

『兵庫縣神社誌』によると、「村社岩田神社 鎮座地 城下村字森ノ上祭神 磐筒之男えんすん神かみ 磐筒之神 磐別神 經津主神 瀨織姫命

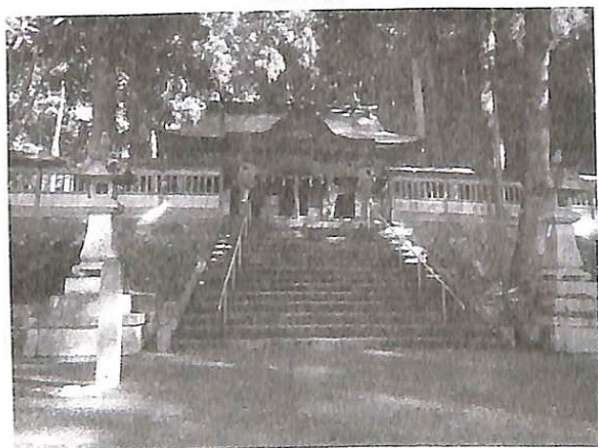
由緒 創立年月不詳なれど元禄十六年本殿を造立し寛延元年同殿の屋根替を行ふ明治六年十一月村社に列し同四十二年瀧神社を合祀せり」とある。

宍粟市内には當屋または頭屋をかつてされていた記録が残っている。山崎町には土方の松尾神社や大沢の五社神社、桓武伊和神社にも頭屋のことが、『兵庫縣神社誌』で紹介されている。

このほか『兵庫縣神社誌』には御形神社の御當祭のことが江戸時代の寛政七年から続いている、御當祭の神事が詳しく紹介されている。進藤千秋宮司によると、三月に御當祭がされることをご教示いただきました。



岩田神社



御形神社

比地条里の研究

金谷の条里地割を中心にして その2

片山昭悟

一、金谷地区の条里地割について

金谷地区の条里地割について今回、小字ごとに概要を説明する。

① 荒木筋（あらかすじ）について

荒木筋について、NO1からNO4を説明すると、荒木筋は、南北に長い小字である。金谷と段の村境の亀ヶ尾から鶴木の平田が北限で、上比地の北河原、中比地の石田が南限となる。西の小字は金谷の蛭町筋、東の小字は安田筋があたり。

荒木筋の約三分の一が長地式の条里地割が存在する。通称は総じて「あらかき」である。

荒木筋には、字曾谷の曾谷池から流れ、金谷の集落と山田を通り、荒木に注ぐ。水路の溜まりを通称「池の尻」という。池の尻は中世の地名と思われる。

NO1において荒木を一般に「大町」と呼び、米作りは上田である。

NO2は、東西方向を基準としている。この一町方格の区域は半折式が主である。

個々の通称は、「荒木」および「大町」である。

NO3は、東西方向の半折式である。ここでも通称は「荒木」と「大町」と一般に呼び、米作りは金谷の村で上田である。

NO3の水田には、中道の道の南には、兵庫県の原種採取圃場があった。

安田筋の境に大溝が存在する。この溝は、幹線水路で鶴木村の土樋からと段の山の下から金谷の池の尻へ、そして大溝に注がれる。

NO4は、東西方向の長地式が全体的に認められる。通称は「大町」で北よりは「くもんぼ」である。この「くもんぼ」を公文坊とも置き換えられる。断定できていないが『看聞御記』にみえる嘉吉三年（一四四三）に伏見宮家領の荘園であった比地の御祈（比地郷）に当たるのが穏当ではないだろうかと考えている。地形復元すると、コンターラインは一〇〇メートルに及ぶ範囲に堀跡ではないかと思われる落ち込みが存在する。

ほ場整備事業に伴う遺跡確認調査において耕作土の下一メートルで河原石を検出している。条里地割の基準の位置に当たり、NO4が南限であり、これより南が中比地の「石田（いしだ）」になる。

② 安田筋（やすだすじ）について

「荒木筋」と「蟻留筋（ありどめすじ）」の間で、南北方向に長く、位置的には比地条里地割の東西間隔においてほぼ中央に当たる。

NO1は、通称は「安田（やすだ）」と呼ばれる。その他の通称は、「五反田（ごたんだ）」・「大町（おおまち）」が存在する。

ここでは、南北方向の半折式と東西方向を中心とする半折式がほぼ同数存在する。

条里地割はやや制約を受けているが、これは菅野川の氾濫によるものと考えられる。

NO2においても同じ状況で菅野川の氾濫によるものと考えられる。このことは、地形復元からもはっきりと確認できる微高地状のラインが表れる。

この付近の通称は、「高町（たかまち）」と呼ばれる。条里地割は、若干東西方向のラインが南に一間から二間ずれている。

その他の通称は「安田」と呼ばれる。

「大溝（おおみぞ）」より分岐し「高町」を北西方向から南東方向に斜めに走る幅一メートルの水路が存在する。このためNO2の南半分は南北方向の半折式で、北半分は、東西方向の半折式である。

NO3は、通称は「安田」と呼ばれる。

「大溝」付近では、洪水時では水田が水没して被害がでるところでもある。

ここは、金谷の総苗代が存在していた。南北軸を中心にして西半分が長地式である。東半分が半折式である。この一町方格は、北を中心に良質な米が採れることから上田である。

地形復元を試みると、NO3には微高地状の地形が認められることから遺跡の存在していたものと考えられる。

NO4も通称は、「安田」と呼ばれる。ここの南限が中比地の「市ノ坪（いちのつぼ）」に接している。ここは南北方向を基準とする半折式が存在する。

③「蟻留筋（ありどめすじ）」

蟻留筋は、南北方向に長い小字で、「安田筋」の東に位置している。千本屋、御名、中比地、鶴木の村境にあたる。

蟻留筋は、南北方向の東溝筋が千本屋、御名、鶴木との村境で重要な地であったものと考えられる。

NO1は、通称「蟻留（ありどめ）」と呼ばれる。東南の角には、「小町（こまち）」と呼ばれる田がある。

NO2は中央より西にかけて南北方向の長地式が認められる。

通称「蟻留」と呼ばれる。中央には、南北方向に細長い「長町（ながまち）」と呼ばれる田がある。この西よりの田には、「がながちよう」と呼ばれる田がある。この付近には雁や鷺が飛来してくるところから名づけられたのであろう。「がながちよう」は聞き取り調査によって、延宝六年（一六七八）の「金屋村年貢帳」に記載されていることがわかった。

また、南角には、「いよきや」と呼ばれるところがある。東中央では、菅野川の副流水と思われる清水が湧くところがある。

NO3は、南北方向の長地式が認められる。通称は「蟻留」と呼ばれる。西隣の安田筋のNO3とともに水田は、金谷では上である。中央には、「むくがつぼ」という通称名がある。

中比地には、「市ノ坪」があり、「六ヶ坪」とも置き替えられることから条里地割に関連する地名であると考えられるが、条里地割に関連する地名とするには今のところ断定できない。

NO4は、南北方向の長地式をとどめているが、城原中学校（現山崎南中学校）の校舎及びグラウンドのため条里地割は原形をとどめていない。

④ 「蛭町筋（ひるまちすじ）」について

糸里地割は、「蛭町筋」にもかつて存在していたものと考えられる。

「蛭町筋」は、「荒木筋」の西側にあたる。金谷の集落のある段丘の下に位置する。「蛭町筋」は、「博労垣内（ばくろがいち）」の通称坂の下より中道の下付近から上比地の北河原までの方格で、糸里地割の復元を試みると、三町方格の糸里地割が存在する。

「蛭町筋」はいずれも深田で蛭が多くいたことから蛭町と名がつけられたものと考えられる。

NO1は、「蛭町筋」と呼ばれる。「博労垣内（ばくろがいち）」の「ちやおすか」付近は国見山より流れ出た土石流れの堆積先端部に位置していることから「蛭町筋」のNO1の糸里地割は制約されている。

「蛭町筋」と、町の付く小字は金谷では一ヶ所である。糸里地割に関連する地名であると考えられる。

NO2は、南北方向を基準とする長地式地割が認められる。この通称は「蛭町」および「大町」である。

NO3は、NO2に続いて、南北方向を基準とする長地式が認められるが、上比地の「北河原」にかけて谷川の土石が堆積しているため糸里地割は制約されている。

この通称は「蛭町」および「大町」と呼ばれている。ここでは、昭和三十年代に瓦製作のために粘土を採掘された。聞き取り調査によると、この時に古墳時代の須恵器が出土したとされる。

⑤ 金谷の水路について

つぎに金谷の水路について述べる。

金谷の中央を流れる大溝は、荒木筋と安田筋を南北方向に流れる幅三メートルの大溝で、金谷と中比地の幹線の水路である。

大溝は、揖保川の荒井堰（あらいせき）からで、庄能、今宿、中広瀬、山田、中井、鶴木を経て城下平野の南部へ注がれる。通称は荒井（あらい）の水路である。

この水路は上溝（うわみぞ）ともよばれる。鹿沢城の崖の下を通り、中井、段から支流の菅野川に注がれる。また、鶴木東にあたる土樋堰（つちといせき）より鶴木の土樋（つちとい）、明神ヶ淵（みょうじんがふち）から金谷の荒木筋、安田筋へ注がれる。

金谷の水路の中で、最大幅で、安田筋の大溝と蟻留筋の荒神溝より金谷の水田に注がれる。

安田筋は水路との落差が一・五メートルあることから高町で水門を取り付けて、安田筋の中央を流れ、安田筋のNO4の水田を潤す。荒神溝は、おもに蟻留筋の水田を潤す。この荒神溝は、溝幅も約二メートルと水量も少ないことから蟻留筋の「むくがつぼ」周辺の水田は、安田筋のNO2の東西方向の廻し溝が時々使用されていた。

⑥ 金谷の村境について

糸里地割について考える場合において村境が重要なポイントを握るものである。糸里地割の起点は、村境がくることが考えられる。金谷の村境について説明する。

金谷の村境は、北から段、鶴木、千本屋、御名、中比地、上比地、

西にはたつの市新宮町の奥小屋と牧に接している。段とは亀ヶ尾から山の下と接している。

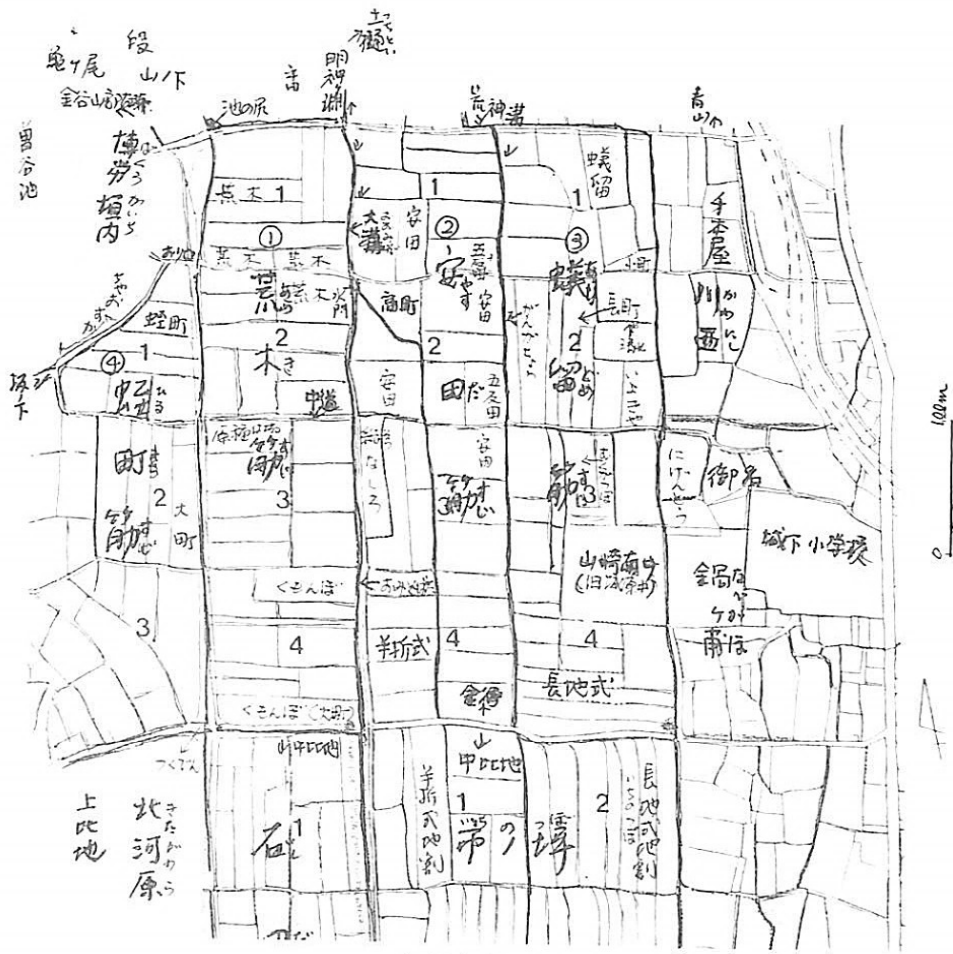
鶴木とは平田、明神ヶ淵、青山までほぼ直線になる。山崎への通り道は、江戸時代には亀ヶ尾の尾根上を通り、段、山崎へ歩いて行っていたことを聞いたことがある。金谷、上比地の人は年貢を納める通路でもあった。亀ヶ尾の尾根上には兵庫県指定文化財（史跡）の金谷山部古墳がある。

千本屋の川西は、鶴木と金谷と接する。川西は旧地形の復元をすると、菅野川の氾濫による堆積層のようにもみえる。

金谷の蟻留筋や鶴木の青山、千本屋の川西、御名の鍋ヶ甫は、菅野川により地形が大きく変化している。（以下次号に続く）



「姫路」米軍 1/40,000標定図(2倍引伸)昭和23年
 拙書『金谷1号墳出土の瑞雲双鸞八花鏡金谷1号墳
 出土の瑞雲双鸞八花鏡を中心にして』1992より転載



金谷条里地割図

会員・家族の文芸

◎冠 句

何度でも 行つてみたいな紅葉山
 穏やかに 余生樂しむ夫婦道
 何度でも 冠題見つめ首捻る
 穏やかに 寝入った孫に添い寝する
 何度でも 挫折跳ねのけ花実つけ
 穏やかに 残る人生歩を進め
 何度でも やり直せるか人生を
 穏やかに 過ぎす心は笑顔から
 何度でも 温泉入り疲れとる
 穏やかに 送り火すませ感謝する
 何度でも やると決めたら最後まで
 穏やかに ほほえむ遺影友拝す
 何度でも 口ずさむ歌あの時よ
 穏やかに 晴耕雨読倣いたい
 何度でも 挑戦かさね喜びを
 穏やかに 昇る朝日に無事祈る
 何度でも 命の刹那紡ぎゆく
 穏やかに 恐れる心ひびぎに敷く
 何度でも 達磨のように起き上がる
 穏やかに 今日朝日に手をあわす
 何度でも 自分の心新たに
 穏やかに 雨の休日過ごす家
 何度でも 草を取っては又生えて
 穏やかに 長水山に日が昇る

坂本 忠彦
 坂本 忠彦
 大谷 志路
 大谷 志路
 宇田 幸夫
 宇田 幸夫
 飯塚 正浩
 飯塚 正浩
 小林 茂樹
 小林 茂樹
 実友 勉
 実友 勉
 嶋津 千里
 嶋津 千里
 為国真佐行
 為国真佐行
 谷笹 まや
 谷笹 まや
 高井 怜依
 高井 怜依
 三木ひづる
 三木ひづる
 中瀬 公三
 中瀬 公三
 中瀬 公三

◎俳 句

コスモスの海をただよふ乳母車
 落葉降る強く激しく憂国忌
 子等の声暁闇縫ふて初詣
 点々と稲架に鶉の五線の譜
 藪椿咲いて辺りを明るうす
 露天湯へ誘う小径沈丁花
 着せ藁やほほえみかえす寒はたん
 公園に子供等戻り凧上がる
 万物を独り占めして青き踏む
 夏やすみ女教師緩み母となる
 着古しも心新たや夏衣
 短日や向日へ移す濯物
 言霊に祈りを乗せて御慶かな
 湧き上る夢見る若さ鷹の空
 出勤すカーブミラーの露時雨
 参道の頭上に紅葉頬染まる
 冬深し鳥の言葉と木々の声
 白梅の神の座する色に合ふ
 村芝居の舞台の跡や野水仙
 小さき鳥大きく啼きて春北風
 ふる里の昼の梵鐘長閑なり
 老い二人の会話途切れて春兆す

鶉

里見 和樽
 里見 和樽
 京屋 伊助
 京屋 伊助
 杉山美保子
 杉山美保子
 高井 麗子
 高井 麗子
 田中 良子
 田中 良子
 鳥羽チエノ
 鳥羽チエノ
 三浦 ゆき
 三浦 ゆき
 高井 智代
 高井 智代
 速水美知代
 速水美知代
 宗平 圭司
 宗平 圭司
 宗平 圭司
 宗平 圭司
 矢野登次郎
 矢野登次郎

※つぎの二句、前号で間違っていましたので、お詫びを申し上げます、
 正しい句を掲載します。
 もう一度 美濃の谷汲参りたい
 晴れやかに 冠句の仲間指を折る

中瀬 公三
 中瀬 公三
 中瀬 公三

事務局だより

平成三十一年度郷土研究会総会のご案内

本会の総会を左記により開催いたしますので、会員の方々はお繰り合わせのうえ、是非ご参加下さるようご案内いたします。

記

日時 平成三十一年四月二十一日(日)午後二時より

場所 宍粟防災センター 四階 研修室

内容 事業報告、会計報告 役員改選 事業計画、予算審議、その他

アトラクション DVDの鑑賞(予定)

なお、このお知らせをもって、総会のご案内とさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

編集後記

『山崎郷土会報 第一三二号』をお届けします。

第一三二号は、平成の最後となりました。

大谷司郎会長の明治以降の山崎の年表(五)について、宍粟市教育委員会次長の田路正幸さんには、泰斗宇野正磯先生の地域史研究についての玉稿をいただきました。

松下宣夫さんと高井淳さんには、日清戦争後の政局をめぐる福原謙七の時局観について品川弥二郎へ宛てた書簡をもとにして紹介していただきました。続いて、河本雅視さんの山崎歴史郷土館(三)郷土館で山崎の歴史を体験してみませんか 山崎町の歴史(鎌倉時代)を、竹内克司さんは、ぶらりふるさと地名考シリーズ①「宍粟」について、伊藤一郎さんの研修旅行記古墳と鉄砲の堺を訪れてと私の上比地の岩田神社の当屋についてと比地条里の研究金谷の条里地割を中心にしてその2と会員・家族の文芸です。皆様のご協力のおかげで充実した号になりました。

なお、頂いた原稿は、原文尊重を第一として編集しています。

今回は地域で取り組んでおられることや話題についての原稿も募集しますのでよろしく願います。

今年は亥年で、十二支の最後の干支です。猪は、幼少期はウリ坊と呼ばれ可愛がられていますが、一方では猪突猛進ともいわれます。皆様にとっても目標に向かって飛躍される年になるよう祈願します。それから研修部で郷土研究会にご尽力いただきました福原町の石野和雄さんがお亡くなりになりました。一三二号でも紹介されていますが、「戦争をしてはならない」との強い言葉が印象的でありました。どうかご冥福をお祈りします。

(片山昭悟)

外科・内科

山中医院

院長 山中潤一

山崎町西町・TEL 620036

ほっと、ひといき

伊沢の里

- 各種宴会 祝い、法要、同窓会(送迎バス有り)
- 宿泊 観光、ビジネス 帰省
- 日帰り入浴 生薬風呂、露天風呂、サウナ
- レストラン 御膳、定食、麺類、井物

兵庫県宍粟市山崎町生谷214-1
TEL.0790-63-1380 FAX.0790-63-0362
URL:www.isawanosato.com E-mail:info@isawanosato.com

PHOTO-STUDIO
Meyama
P.C.S

スタジオウエヤマ

- 山崎店 兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL (0790) 62-8027
FAX (0790) 62-8827

株式会社 安井書店

兵庫県宍粟市山崎町山崎90
TEL (0790) 62-0700
FAX (0790) 62-2117

<http://www.yasuisyoten.co.jp/>



パンフレット・デザイン広告
名刺・封筒・伝票・新聞広報誌
ポスター・案内状・シール等

(有) 稲田印刷

〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL (0790) 62-0254 FAX (0790) 62-4764

まごころを伝えます。

一献献上 品質本位

地酒



確かな品質と味わい。



SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

TEL.0790(62)1010 FAX0790(62)6218
E-mail info@sanyohai.com HP <http://www.sanyohai.com>

いとう画廊

兵庫県宍粟市山崎町山崎413
TEL (0790) 62-0371
FAX (0790) 62-0371

創業明治28年・さつき本舗

四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を

御菓子司  

本店：播州山崎町山田 (電) 62-0160